

ポツンと篠原國堅の墓

「鹿児島近現代」教育研究センター 客員研究員 友野 春久

「ポツンと…」というテレビ番組が人気らしい。衛星写真で日本各地の人里離れた一軒家を捜し出し、テレビスタッフがその地を訪れ、居住者の人間模様を紹介する番組である。

鹿児島市営郡元墓地にポツンと苔むした個人墓が建っている。ここ数年、掃苔の際に気にかけていた高さ1m程の墓である。小さい造花が手向けてあるものの、墓域内は背の高い草に覆われており誰も観ている様子はない。墓全体の写真を撮り、刻まれた文字をパソコンに落とし、この被葬者を調査することにした。正面に「篠原國堅之墓」、他の面に明治三十九年一月七日生、昭和十一年九月十七日死、行年三十一歳、また裏面に篠原静子・昭和十二年十月二十七日亡・三歳と読める。

明治10年西南戦争時、薩軍一番大隊長篠原冬一郎國幹も通字に「國」を使っているの、この家との関係を調べたが今のところ判明していない。

調査を進めていくうちに「篠原國堅」は明治45年4月、鹿児島県立女子師範学校附属小学校に入学。在校中に、昭和の初め「生命の綴方教授」の主唱者として著名な、同校訓導田上新吉（1889生～1945没）との出会いを知った。これが國堅の俳人としてのスタートである。田上は大正6年9月に広島高等師範学校附属小学校訓導として転任、國堅は6年生の時に鹿児島駅で田上を見送っている。後広島の田上与俳句について手紙のやり取りをしているので、その一部を紹介しておこう。

御手紙を有難く拝見しました。おかはりもありませんさうで、結構にぞんじます。これから時々俳句を書いておくりますか

ら、なほして下さい（鹿児島 篠原國堅）。

蔓枯れし朝顔の種子とる秋のまひる
山茶花の鉢庭に出す晩秋の草取り
箒握る朝の露手拭にてふき取る

國堅少年から手紙数通を受けた田上は、「篠原君は私が鹿児島にいた時分の生徒であります、これは私が広島へ来た年に貰ったものであります。俳句は所謂、“新傾向”の行方によったもので、季題とか調子とか舊來の約束に従って居りません。作者の生活から生まれた尊い感激の結晶である点に注目」（『鑑賞読本』大正13年）と評し、その非凡な才能を感じ新興俳句を予見している。

篠原國堅は父政治（医師）と母あさの次男として鹿児島市池之上町91番に生まれ（『篠原鳳作』）、姉5人、兄1人、弟1人（3歳で夭折）がいた。小学校卒業後、鹿児島県立第二中学校、第七高等学校造士館文科甲類、昭和4年3月に23歳で東京帝大法学部政治学科を卒業した。東大在学中の昭和3年「ホトトギス」に雲彦の俳号で投句し初入選している。卒業時の昭和4年は米国に端を発した世界恐慌の影響で日本経済も危機的な状況にあり、東大法卒の学歴も効果なく職を得られなかった。また体が弱かったため帰郷したともいわれ、この頃から俳句に本格的にのめり込んでいく。同6年鹿児島市で「天の川」支部を創設したのち、同年3月沖縄県立宮古中学校教諭に赴任し、公民・英語の科目を担当。季節感のない亜熱帯の宮古島で未踏・雲彦のち鳳作（ほうさく）と号し、この時から沖縄の風土をふまえた“無季俳句”を句作、昭和8年「傘火」を創刊し、横山白虹・西東三鬼らを迎え新興俳句を推進した。約3年間の宮古中

学校勤務の後、昭和9年2月に母校第二中学校へ赴任する（『会員名簿』二中・二高女・甲南高）。二中ではもの静かで温和な教師と知られ、句作では批評を謙虚に聞く人柄であった。教職の傍ら吉岡禅寺洞（福岡県）に唱和し無季俳句運動を積極的に推進し、雑誌「馬酔木」（あしび）と論争した時期もあったが、後世俳壇史に名を残すことになる。

同10年、衆議院議員・鹿児島銀行頭取を勤めた前田兼宝4女秀子（大正2年11月生）と結婚する。しかし同11年9月17日加治屋町で亡くなったという。盟友の西東三鬼は、あまりにも早い逝去に追悼句「葡萄あまししづかに友の死をいかる 三鬼」と詠み、吉岡禅寺洞は「鳳作君は毎年一度か二度は必ず訪ねてきて、泊まってくれた。彼を“内心に覇気を有する牛のような人”だと私たちは云っていた。あの鹿児島人特有のアクセントが、頭から一生離れないであろう」と云い國堅を送った。

この亡くなる前の様子を淵脇 護は著書『かごしまの俳句』に次のように書いている。「昭和11年長女静子誕生（1年後死亡）。5月ごろから首筋の痛みを訴え、妙見温泉等で治療したが、快方に向かわず発作的な嘔吐をみるようになった。9月病状急変、医師も間に合わず心臓麻痺で逝去、30歳。昭和12年長男正義、前田家で誕生」。

この記述から墓碑銘の「静子」は國堅娘であることが分かった。妻秀子の実家前田兼宝家はこの時下荒田町45番地にあるので（『官報』第3038号、昭和12年）長男正義はこの地で生まれている。故人の死因を究明するのは如何なものかと思うが、知人の医師に前記症状を示したところ、本人を診たわけではないので医学書的な推測との前提で次の回答を得た。「首筋裏の痛みなら脳動脈瘤などの脳圧亢進による嘔吐、脳動脈瘤破裂による突然死の疑いあり。心臓麻痺

=心臓が止まった状態の発見だから心臓が原因ではないと考える」。つまり頭の中の血管に瘤があって、これが頭蓋骨内の脳を圧迫、神経が押されて首の痛みと脳内圧亢進による嘔吐、血管の瘤が弾けて亡くなったという解説であった。

郡元墓地は市中心部の南林寺墓地廃止に伴う墓石移転先の一墓地で、大正8年3月1日に開設された。掃苔中に「大正8年南林寺墓地より改葬」と刻した古い墓に出会う。墓地開設17年後の昭和11年9月以降に國堅の墓は建てられたことになる。しかし家族の篠原家墓は周囲に見当たらず、主題にみるように「ポツン」と建っている。何とも不思議な光景である。

前述のように昭和6年宮古中学校に勤務した國堅の功績を称え、宮古島市南西の丘陵地鎌間嶺公園に鳳作の句碑が建立されている。昭和47年11月20日に秀子未亡人、遺児の正義、俳句会多数の出席のもと除幕式が行われた。また指宿市長崎鼻にも建てられている。

ここで國堅の家族について触れておこう。父政治は鹿児島県士族で安政2年（1855年）6月15日生まれ。『日本医籍録』大正15年出版に「従来開業」とみえるので古くから医業に携わっており、熱心なキリスト教信者でもあった。明治10年西南戦争時は21歳になり、薩軍として従軍し医療活動に従事していたのかも知れない。

政治は昭和11年発行『鹿医誌』物故会員中に名がみえる。國堅と没年は同じだが「父82歳にして昇天す」（『現代俳句集』昭和32年）と書いているので政治が先に亡くなっている。

兄は國彬といい、明治35年10月15日生。大正11年県立第二中学校を経て東京歯科医専に学び昭和2年に卒業。東京などで3年間研修した後同6年宮古島赴任、翌年平良町西里250番地に歯科医院を開院した。妻光

柄は明治42年生、長男壽宏は昭和9年生（『沖縄県人事録』）。宮古島での開院は弟國堅が宮古中学校勤務であったので、この事も関係していると思われる。戦争中の昭和20年1月鹿児島市に引揚げ、同22年9月上荒田町91番地（現荒田1丁目）で再開院しており、現在も同地に篠原歯科医院は続いている。

筆者はここまで墓碑銘、資料をもとに國堅の経歴・事績と家族について述べてきた。しかし疑問を感じる記述資料もあるので記しておきたい。

いくつかの資料は誕生地を「池之上町91番地」としている。この番地の土地所有者を調べるため鹿児島地方法務局所蔵「旧土地台帳」池之上町全地番に篠原姓を捜した。ただ、篠原家が当時他人名義の宅地に住んでいたとなるとこの手法は使えない。調査の結果91番地に篠原はみえなかったが、同町内に篠原政治が所有の宅地6筆、原野1筆がみえた。この宅地すべては市立玉龍中・高校正門前の道路を隔てた現在の池

之上町14番から21番街区に集中している。最も有力な出生地は國堅誕生時に父政治が旧来から所有の池之上町113番地、宅地95坪（「旧土地台帳」）現在地同町14番街区であろう。ここで注意したいのは、前掲「91番地」は明治19年式戸籍の本籍地表示の屋敷番号「91番戸」ではないかと考える。明治31年式戸籍に至るや本籍地表示に居住地「地番」が用いられた。つまり屋敷番号「番戸」と土地地番「番地」は必ずしも一致しない。

また一部資料に生年を明治39年10月29日、享年29歳。没日を9月11日、さらに年譜を元に明治38年10月29日生まれが正しいという、とする資料もある。墓は後世まで残るものであり、遺族が生没日・享年を間違えることは考えにくく、筆者は墓碑銘の刻字を信じたい。鹿児島市は無縁墳墓の撤去整理を進めており、87年前に建ったこの墓はいつまでこの地にあるのだろう。

いずれにせよ國堅は池之上町に生まれ、無季俳句を提唱実行した旗手であった。